

アジアと北米のエネルギー相互依存関係の深化に向けて

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
常務理事 首席研究員
小山 堅

4 月 2～4 日、カナダ・バンクーバーにおいて、第 4 回 Pacific Energy Summit が開催された。本会議は、米国のシンクタンク、National Bureau of Asian Research (NBR) が主催するもので、今回はカナダの Asia Pacific Foundation との共催となった。会議のテーマは、「Forging Trans-Pacific Cooperation for a New Energy Era」と題され、アジアのエネルギー需要増大と北米の非在来型エネルギー供給拡大、という二つの大きなトレンドが今後どのように発展していくのか、その中で両地域のエネルギー相互関係がどう深まっていく可能性があるのか、という極めてタイムリーな問題に集中した議論が行われた。

この Summit は、第 1 回が東京、第 2 回がジャカルタ、第 3 回がハノイ、といずれもアジアの都市で開催され、アジアのエネルギー問題に焦点を当てた議論が行われてきた。今回は開催地が北米となり、アジアの問題に加えて、世界が注目する北米の非在来型も含めた石油・ガス供給の大幅拡大の意義とアジア市場との関係密接化、という視点が加わったものである。

開催地カナダからは、政府関係者、エネルギー産業関係者等多数の参加があり、本会議のテーマに対する関心の高さが窺われた。また、会議では、カナダの在来型・非在来型を問わず、石油・ガス資源の豊富さ、投資先としての魅力・安定性、石油・ガスの輸出に対する自由度の高さ、など多くの利点がカナダ側参加者から指摘され、同時に拡大するアジア市場への参入・販路確保に向けた高い期待があることを実感した。

なお、カナダ側のアジアへの期待の裏側には、主力輸出先である米国におけるシェールガス革命の進展で、ガス価格低下などの影響も含め米国向けガス輸出が厳しい状況におかれていること、石油輸出についても WTI がブレントなどに代表される「世界価格」から割安に価格付けされることからカナダ産の原油価格もさらに下押し圧力を受け、販売価格が低迷していること、カナダ産オイルサンドを米メキシコ湾岸に輸出する Keystone XL パイプライン計画が環境問題等の影響で進捗が難航していること、等カナダにとっては、対米国市場戦略において様々な課題を抱えていることがある。その意味で、カナダにとってのアジア市場開拓は、ロシアが欧州市場依存からアジア市場を目指していることと類似点が見いだせない事も無い。換言すれば、カナダにとってアジア市場開拓は、新規の市場開拓、販路の多様化、そして拡大する（アジア）市場への参入、という重要な意味を持つ。

また、米国についても、シェール革命進行の現状と展望について、LNG 輸出問題を巡る国内議論の状況について、など様々な興味深い議論が行われた。中でも筆者にとって印象が深かった議論は、①極めて豊富な資源量と拡大する供給を背景に、対日輸出も含めアジ

ア市場向けに LNG が輸出されることは経済原理の観点からはいわば自然・必然の流れであること、②他方、アメリカの国内議論の中には、「豊富 (Abundance)」でなく、70 年代の石油危機以来の「欠乏 (Scarcity)」というトラウマが残っており、それが政策論にも影響していること、③アメリカは間違いなくエネルギー自給化の方向に向かうが、それでもアメリカの国際エネルギー市場安定化へのコミットメントは揺るがないとの意見が繰り返し表明されたこと、などであった。

もちろん、アジアのエネルギー市場の動向や展望についても、活発な議論が行われた。長期停滞から回復の兆しを示し株高に沸く日本、昨年の景気減速から立ち直りつつある中国、インドや ASEAN 諸国などの経済成長によって、アジアのエネルギー需要が大きく増大していくこと、その中で、再生可能エネルギーや原子力などの高い伸びが期待されること、それでも、主力エネルギーである石炭を始め、石油、ガスなど化石燃料が今後もアジアのエネルギーの中心であり、その安定供給確保がアジアにとって重要な課題であることなどが指摘された。

その中でも、やはり LNG に関わる問題に議論の焦点が当たったことはある意味で当然であった。アジアにとって、大きく増大する LNG 需要に対応し、量と価格、双方の安定供給確保が重要である一方、米国・カナダで多くの LNG 輸出計画が検討・準備され、しかも、そこには日本・中国・韓国など多くのアジアの企業が参画しているからである。日本でも極めて高い関心を集めている LNG の価格形成問題に特化したラウンドテーブルも実施され、アジアの買手にとって、より競争的な価格での LNG 調達が喫緊の課題となっていること、そのため、調達源と価格決定方式の多様化の双方の意味で北米からの LNG 輸入が大きな意味を持つことなどが指摘された。アジアにおけるハブ形成の可能性、欧州市場におけるガス価格形成を巡る売手・買手間の議論の経緯と現状、より流動性の高い LNG 市場形成の重要性と仕向地条項の問題、など本件に関連して興味深い議論が行われたことが特に筆者にとって強く印象に残った。

また、アジアの問題を議論する中で、改めて会議参加者の間で、特に中国への関心が非常に高いことを改めて実感した。震災後の日本の LNG 需要増大と今後の原子力再稼働問題、インドや ASEAN、そして韓国の今後の需要動向、などアジアでも重要な要因が存在するが、やはり著しい成長を続け、石油輸入でも米国を抜いて世界 1 位になる勢いを示している中国の市場動向や政策状況に関心が集中したのは自然な流れと見るべきかもしれない。

最後に筆者にとって印象に残ったのは、本会議では、エネルギー問題と環境問題への関わりに関連して、再三再四、様々な指摘がなされたことである。これも、昨今の中国の大気汚染問題の深刻化や、非在来型石油・ガス資源開発の進展と共にクローズアップされている水汚染問題、さらには開催地カナダと米国が関連する Keystone XL パイプライン建設計画を巡る環境懸念の問題など、身近で目の前にある問題が多数存在しているからであろう。と同時に、地球温暖化と気候変動問題への対応の重要性とエネルギー面での対策の観点で様々な指摘が行われたことも印象深かった。昨年の米国でのハリケーン・サンディによる甚大な被害の発生や 2 期目を迎えたオバマ大統領が就任演説等で温暖化対策の重要性に改めて触れたこと、等がその背景にあるものとも思われる。環境問題とエネルギー問題は同じコインの裏表の性質を持つだけに、米国の、そして世界の環境問題を巡る動きにも注目していくことが重要であることが改めて認識させられることとなった。

以上